

● えこ&びーず ★

2012

# Actio

6

定価 525 円 (税別)

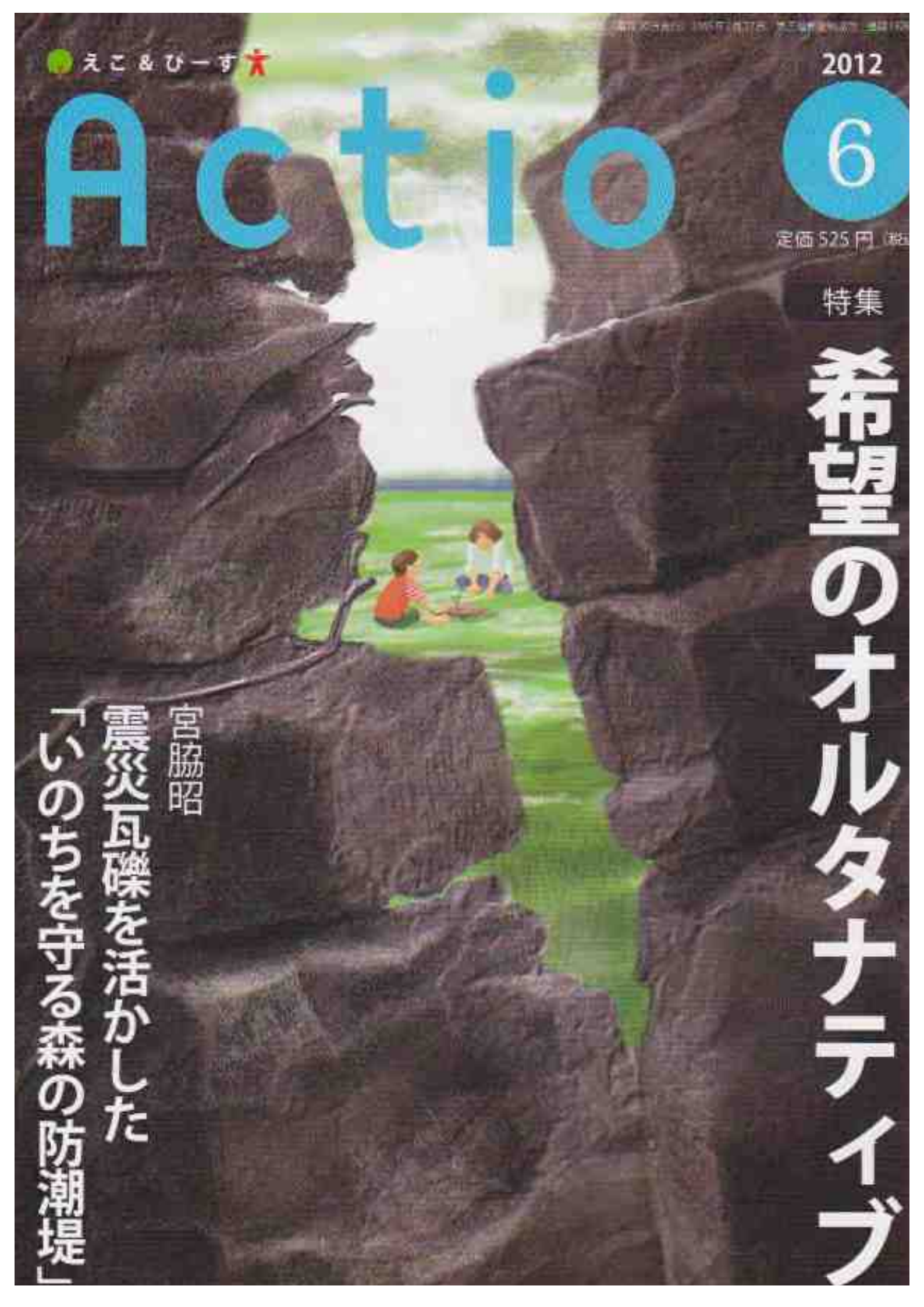
特集

## 希望のオルタナティブ

宮脇昭

震災瓦礫を活かした

「いのちを守る森の防潮堤」



シンポジウム「東海地震と浜岡原発」今、私たちにできること」

# 浜岡原発が地震によって放射能漏れ事故を起こした場合の防災計画について話し合う

4月7日、市民団体「ふじのくに浜岡原発を考える会」主催によるシンポジウム「東海地震と浜岡原発」が開催された。このシンポジウムの目的は、浜岡原発の是非を問うことではなく、東海地震により浜岡原発が放射能漏れ事故を起こした場合の、防災計画策定のきっかけを作ること。

また防災計画は、健康者を中心に策定されている場合が多い。東日本大震災では、情報伝達が不十分なため、避難所で食事を得られなかった者がいたと聞く。このため、健康者に限らない者の存在を再認識してもらおう目的を兼ね、聴覚障がい者のための手話通訳、要約筆記、磁気テープを用意した。

シンポジウムでは、以下、8つの議題について、静岡県職員、教之原市長、原子炉専門家、地震・防災専門家、現状と課題について

発言し、さらに市民パネリスト2名を加えディスカッションを行った。

①国・他都道府県との連携、県民への情報伝達方法、②避難方法、③緊急避難場所、④長期に渡る場合の避難、⑤ヨウ素剤の配布、⑥放射能漏れ事故防止と事故が発生した場合の対策、⑦使用済み核燃料の最も安全な保管方法、⑧予想される東海地

震と原発事故についての日頃の心がまえと準備

## 現実的防災と矛盾する再稼働

このシンポジウムでは、これまでにない踏み込んだディスカッションが行われた。東海地震、津波、そして放射能漏れ事故が同時に発生した場合、特に海岸沿いの浜岡原発周辺地域の住民は、正直な判断がない。地震で道路が崩壊したら、ヨウ素剤は配布できないし、避難自体が難しい。原発の是非は問わずとも、パネリスト全員が、被害を最小限に抑えるには、浜岡原発は再稼働すべきではないとの結論に至った。

特に、浜岡原発の設計にも関わった原子炉専門家の渡辺敏雄氏からは、津波に影響のない高台に乾式（空冷）貯蔵施設を建設し、使用済み核燃料を空冷式で保管することが提案された。空冷式は水冷式と違い、全電源

が喪失しても冷却できるが、数年間かけて使用済み核燃料をある程度冷やす必要があるため、やはり再稼働しないことが条件となる。

## 他人任せにせず対立ではなく対話を

3・11後、市民の行政に対する信頼は地に落ちた。原発の安全神話が崩れ、福島第一原発事故後の行政の対応を見れば、市民が行政に不信感を募らせるのは当然だろう。

しかし、巨大地震と原発事故が同時に起きた時の現実的な防災計画は、行政と市民の協力と信頼関係をなしに、策定することはできないだろう。

ノーチアノクシマ、福島の事故の可能性がある限り、原発の再稼働はありえない。

この静岡県議員の小林佐登志氏の発言に対して、会場から拍手が起きた。そして同氏は、「政府として、原子力発電所とどう

向き合うのか基本方針を、まず国民にきちんと伝え、その上で国民と議論をすることが大切だ」と続けた。中部電力には出演を依頼したが叶わなかった。しかし、市民、行政、専門家は同じテーブルに座り、対立することなく冷静に話し合った。市民と静岡県は信頼関係を築く第一歩を、踏み出すことができたのではないだろうか。

シンポジウムで学んだ意見、課題は提言書としてまとめ、静岡県、県内の市町、中部電力、報道機関に届け、静岡県全体で共有する。市民一人一人が、他人、国任せにせず、原発のことを自分の事として考え、社会に押し回さず、自分で、現実的な防災計画が策定できるのは、私たちが市民なのだから。安全で安心できる社会を作るのは、私たちが市民なのだから。第二部のパネリスト6名の忌憚のないディスカッションは必見。シンポジウムHPで視聴可能▼<http://shizokanmai.jp/index.html>

【三倉由紀枝】3・11以降、浜岡原発の運転中止・廃炉を求め、脱原発活動を推進。STOD（市民ネット）<http://stodnaikan.org/>、シンポジウム「東海地震と浜岡原発」で、私たちにできること」の事務局を担う



会場では聴覚障がい者のための手話通訳・要約筆記、磁気テープを用意